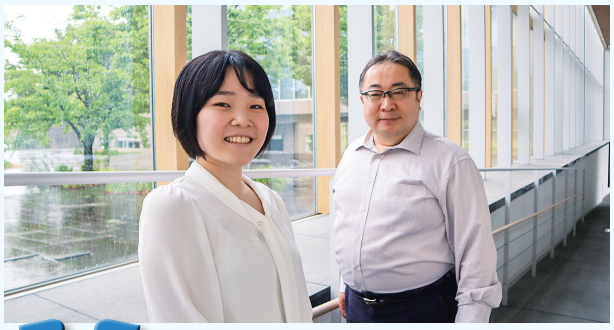
在学生・修了生の声

◆研究領域・演習（ゼミ）紹介



組織経営領域

修士課程1年　遠藤咲織さん
［金融機関職員］
教授　三木潤一
［公共経済学・財政学］

演習の様子を教えてください

遠藤：私は経済学分野から老後の資金問題について研究を行いたいと考えています。演習では、三木先生より指定された経済学の基本的な図書などを読み進めて、三木先生に解説していただいています。

三木：経済学の研究は、確立された「ディシプリン」（discipline: ある学問における固有の研究方法）に基づき行われます。その手法に従って研究を進めていくのですが、遠藤さんは、大学時代に異なる専門分野を学んでいたため、入学して間もない今の時期は経済学のディシプリンを身に付けることに重きを置いています。とても大変なことですが、根気強くコツコツ取り組んでくれています。

遠藤：学部の三木ゼミ4年生で大学院進学を希望している学生さんも私の演習に参加してくれています。同じテキストを使用し交代で発表を行っているため、1人だけでは気づくことができない視点をもつことができ、また意見交換をすることで自分の中で腑に落ちやすくなっていると感じています。

仕事と学生生活の両立はいかがですか

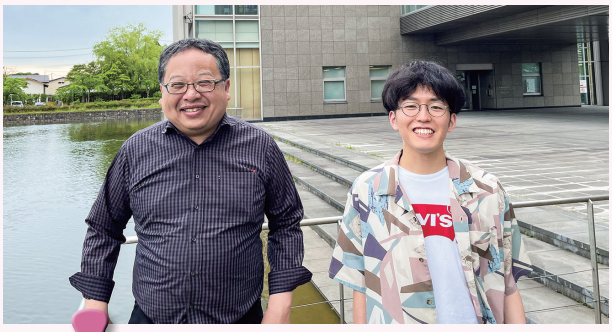
遠藤：大学院入学前までは支店で接客業務をしていましたが、入学するにあたり本部に異動しました。大学院にいる時間は業務時間として扱っていただいていますし、勤務先から積極的な有給休暇の取得を勧められています。レポートや演習での課題に時間がかかりそうなときはぜひ活用していきたいです。また、勤務先からは大学院で学んだことなどを業務に還元してほしいと言われています。金融機関であるため、経済学を学ぶことはもちろん、統計学や政策などについても深く学び、役立てていきたいと考えています。

三木：企業の方には修士課程での学修・研究を通して大学院の価値を知っていただきたいです。遠藤さんが勤務先でパイオニアとして活躍することは私も期待していますし、それに繋がるよう、学修・研究をサポートしていきます。

入学検討者へのメッセージ

遠藤：大学院に入学して初心に帰ることができていると感じています。業務に追われると忘れがちな地域社会のことなどについて考えることができますし、今話題のリスキリング・学び直しということからもおすすめしたいです。

三木：公益大は地域に根差した教育研究が特色のひとつです。人口が減少し、日本の地域が今後どのようにすれば良いか十分にはわからない状況で、10年後、20年後の地域のあり方について画を描いていかないといけないと考えています。より良い社会をこれから築いていくために公益大大学院で、学術的な背景を持って考えられるよう自己研鑽をして、力を養ってもらえればと思います。



国際関係領域

修士課程1年　先崎大裕さん
［公益学部 国際教養コース卒業生］
教授　玉井雅隆
［国際関係論・多文化共生論］

研究テーマと演習の様子を教えてください

先崎：学部時代も玉井ゼミでした。卒業論文のテーマが広かったため、修士課程ではその内容のうち、まだ世の中に注目されていない部分にフォーカスを当てて研究することにしました。

玉井：今の日本は、多文化共生せざるを得ない状況にあります。アメリカなど外国の事例をもとに仮説を立てそれを日本の事例に落とし込み、立証していきます。先崎さんの研究テーマは「実践」はあっても、まだロジカルに構築されていないものです。きっとおもしろい論文ができ、評価されるのではないでしょうか。

先崎：今のゼミでは、開始10分はくだけた話をしていますが、その後は真剣な時間です。読んだ本・論文の内容をまとめてきたものをプレゼンし、アドバイスをいただきます。予想外の質問が来ることもしばしばです。

玉井：意味を問うことが多いですね。その答えは研究に繋がっていきます。ロジックとして不適切と思う部分は指摘しますし、ゼミの中で答えが出なかった場合は、次週の宿題にしています。

先崎：学部時代も玉井ゼミは学生にとって鋭い質問が多くて、少しは力がついていたと思うのですが、まだまだですね。

玉井：他大学との合同ゼミもありましたので、先崎さんは研究のベースができていると思いますよ。

先崎：修士課程に入って多くの論文を読む必要あるため、英語に慣れる時間をもっと取ればよかったとも思いました。玉井先生の言葉を励みに研究を進めていきたいです！

公益大大学院の良いところはどこでしょうか

先崎：研究領域・研究テーマが異なる学生がいることが大変刺激になります。そもそものバックグラウンド―地域・年代・職業などが多様な社会人の方々と一緒に授業を受けているのですが、それぞれの現場で何が起きているのかを大変興味深く聞かせていただいています。社会人の方の要点のまとめ方がロジカルで、グループワークでも無理やりさがなくひとつにまとまっていくため勉強になります。

玉井：先崎さんも、意識はしていないかもしれませんが、学部のゼミを通してアカデミックな考え方・ロジカルな考え方はできるため、社会人と一緒に授業を受けていても劣ることはないでしょうし、多様な方とミックスされてレベルアップしているかもしれませんね。大学院に入って見識が広がったのだと思います。大学院で出会う人は多くの経験をしていますし、特に院生同士の話は大切です。先崎さんにも人との交流を通して、様々な経験をしてもらいたいです。

先崎：はい、そうですね。それから、致道ライブラリーも便利です。他の大学が所蔵している図書を有料で取り寄せできることは珍しいことではないのですが、慶應義塾の首都圏3キャンパスに所蔵されている図書は、公益大大学院の連携機関ということもあって無料で取り寄せできます！ローカルな地域でも不便さを感じることはないです。

玉井：大学院は鶴岡の中心地にあるため気分転換もしやすい。研究環境としては良いですね。図書も取り寄せでき、多くの論文がウェブでアクセスできますから、都会に行かずとも最新の研究はできます。

先崎：共同研究室＊が24時間使えますし、研究だけではなく必修科目の課題のために遅い時間までいることもあります。環境が整っているからこそできることですね。

入学検討者へのメッセージ

玉井：人生は回り道をしたほうが楽しいです。見えるものが増える、人生は何倍にも楽しくなります。公益大には様々な教員がいて、「宝箱」のようだと思います。ご自身が深めていきたい分野の教員に出会えると思います。ぜひご自身の手で開いてみてください。

＊共同研究室については下記URL先でも紹介しています。
https://www.koeki-u.ac.jp/academics/gs/guidebook/gsNewsletter_202301.pdf

情報科学領域

修士課程1年　榊原一心さん
［公益学部 経営コース卒業生］
教授　神田直弥
［交通心理学・人間工学］

研究テーマについて教えてください

榊原：学部も公益大で、経営コース・広瀬ゼミでした。情報システム関連の企業や異業種を経て、大学院に入学しました。修士課程では、小中学生の情報教育の動機付けを研究テーマとしています。先行研究が多数ある教育学ではなく、心理学からの視点で仮説の立論と検証に取り組みます。

神田：近年、義務教育においても、異年齢教育・協同学習が取り組まれています。授業は、教員・生徒・教材の３つがインタラクティブに関与します。榊原さんの研究は「生徒」にフォーカスを置いています。年齢が異なる生徒が一緒に授業を受けることによる効果はあるといわれていますが、実際には課題もあり難しいものです。榊原さんはより良い教育の在り方を模索していて、私の専門である「心理学」の視点から研究をサポートしています。

演習はどのように進めていますか

神田：入学後、まずは研究テーマを見つけるところからスタートしました。先行研究レビューがとても大切で、多くの論文を読んでもらいました。現在は、研究計画を考えていて、そろそろ固める時期です。

榊原：論文などを読んで調べ、レジュメを作ります。そして、演習の中でレジュメに対するアドバイスをいただいています。読んだ論文の中で理解ができなかった部分を解説していただくこともあります。

神田：榊原さんは、社会人経験・実践経験があるため、論文を読むと腑に落ちることが多いと思います。研究において、「体験があること」は社会人学生の強味だと思います。修士課程２年の間には、複数回の実践を通して仮説を検証していきます。

どのようなことに研究のおもしろさを感じますか

榊原：「人の反応」を分析した後、「数字」となって表れたときにおもしろいと感じます。研究にあたっては「尺度」を使おうとしていますが、先行研究を読み、その尺度に出会えると「先人たちは偉大だな」と思います。また、毎週火曜日に演習をしていますが、終わってから週末までは悩んでいます（苦笑）。２日前にレジュメ作成に取り掛かり、それが完成すると「次の演習で見てもらったら、どこまで進むかな？」と、緊張よりは楽しみの気持ちのほうが強くなります。

学生生活について教えてください

榊原：私は入学前に「科目等履修生」として５科目履修・10単位を修得しています。そのおかげで、入学後の履修授業・修得必要単位数は同期の学生に比べれば少なく、演習・研究のための時間を多くとることができていると思います。社会人の方にこそ科目等履修を経た入学はおすすめです。

普段は、自宅とキャンパスそれぞれで、授業の課題や研究活動をしています。人目のあるところの方が刺激があって集中できますね。

入学検討者へのメッセージ

神田：公益大大学院の良いところは、研究分野が広いことだと思います。現代社会には、特定の学問だけでは解決できない問題が多数あります。実務をしている社会人の方については、大学院での研究を通して知識・観点を広げられるでしょう。そして、人的ネットワークの幅も広がります。ぜひ知見を深めて、現場で活用してもらいたいです。

地域共創領域

修士課程1年　後藤真琴さん
［高等学校教員］
教授　呉　尚浩
［公益学・環境社会学］

演習・研究テーマについて教えてください

後藤：最初のゼミで、呉先生が公益の基本は「いのちを大切にすること」と話されていました。実は私自身が教員として心に留めていることで、それぞれのベースにあることが同じと分かり、嬉しく思いました。

呉：そうでしたね。後藤さんとお話をしていると、高校と大学の違いはありますが、教育の姿勢や直面している課題についてとても共通点を感じます。演習指導は教員としても気づきが多くありますし、私自身の研究の振り返りのよいきっかけにもなります。

後藤：私は高校教員で、探求型学習が研究テーマです。その学習に「共創」「協働」がキーとなると考え、呉ゼミを選択しました。生徒・学校と地域の方のより良い連携、相互に益となる学習のあり方を構築したいです。具体的なテーマの決定にあたっては、呉先生に相談しアドバイスをいただきながらじっくり考えました。他の方より時間がかかっているかもしれませんが、私自身が納得したテーマへの絞り込みができています。大学院に入学してから感じたのですが、仕事・実務と研究では、必要とする集中力が異なる気がします。「論文作成法」で論文の基礎を身に付け始めた段階なので、これから本格的に研究に取り組んでいくところです。

呉：履修している講義での学びを活かしながら、毎回の演習で意欲的に取り組んでいる姿勢が感じられますよ。

大学院で行うことは「研究」ではありますが、アカデミックなことに限らず、後藤さんの仕事の現場に持ち帰って活かすことを意識したアドバイス・サポートをしていきたいですね。院生本人が何を深めていきたいかを一緒に考えながら、その材料提供を心がけています。

「地域共創」は、「みんなで悩む場」が必要です。立場の異なる人が、仕事などの自分の枠組みを超えて当事者として関わり、どれだけ課題を共有できるか、地域資源の価値に気づくことができるかという視点が重要です。素敵な共創の場づくりのための工夫について、後藤さんには研究を通して独自のものを産み出してほしいです。

大学院の授業を受けて感じたことを教えてください

後藤：研究に必要な知識・理論・スキルの修得のために、さまざまな科目を履修していますが、私の専門ではないことを知ることがとても楽しいです。「言葉だけは知っている」という物事が、実は身近な生活に繋がっていることに気づきました。演習では、呉先生の専門のひとつである「海ごみ」について問題の責任がどこにあるかを教えていただいたのですが、多くの立場の人がいて、問題が幾重にも重なり合って大変複雑です。法制度の改革などが必要な上に地球規模の構図がとても大きい問題だということを知りました。

共同研究室では、同期とも先輩とも話ができてありがたいです。授業の課題レポートについて相談できますし、違う業種の方との話はとても面白いですね。

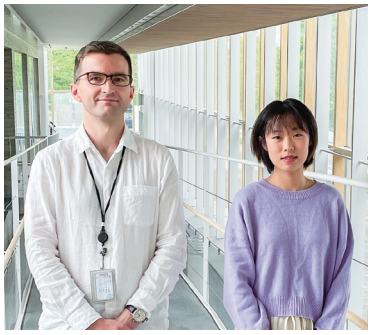
学術的なことはもちろん、大学院で得られる人脈は本当に貴重で、仕事にも活かされていくと感じています。「学びたい」と思った時に、先生方をはじめ、大学院がここにあることの価値は大きいと思います。

入学検討者へのメッセージ

呉：公益大では、開学当初より「多様な主体の共創」「学問の壁を超えること」「地域とのつながり」を大切にして、研究と実践を積み重ねてきました。「地域共創」というキーワードを提唱したのも、公益大が全国の先駆けです。「多様な主体の共創」は、世界の多くの問題を解決するための大きな鍵といえるでしょう。また、大学院では、現場と研究と往復しながら、ひとつのテーマにフォーカスして深く学ぶこともできます。公益大大学院を通して、公益のまなざしで世界を見つめ直してみませんか。

情報科学領域
外国人留学生

修士課程2年　田　　雨冉さん
［公益学部 国際教養コース卒業生／中華人民共和国出身］
教授　ノヴァコフスキ カロル
［自然言語処理］



入学の経緯と研究テーマを教えてください

田：私は日本に留学し、公益学部の国際教養コースで各国の文化・言語を学びました。当初は「グローバル」「国際関係」に興味があったのですが、留学を通して、母国に関心を持つようになりました。私は、中華人民共和国の少数民族「ナシ族」のひとりです。ナシ族の中でもごく一部の人のみで受け継がれている「ナシ語」とナシ語で用いる象形文字「トンパ文字」はナシ族独有の文化のひとつで、その文化がなくなることは惜しい・守りたいと思い、トンパ文字を情報処理技術によって解析することを研究テーマにしました。約2,600ある象形文字の1つ1つに、アノテーション（意味情報付け）をします。長期的には、私自身の研究成果を通して、他の方の研究や教育を支えることに繋がれば、と思っています。

演習はどのように進めていますか

田：今日は院生研究報告会の発表用スライド作成を進めました。毎回、私が作成した資料を先生に確認していただき、アドバイスをもらいます。
ノヴァコフスキ：しなければならないことを一緒に決めています。田さんが研究で立ち止まってしまわないよう、難しいと感じられた部分については解説したり、一緒に検討しています。
田：授業は、穏やかな雰囲気で、相談が自然とできます。授業前はすごく緊張するのですが、アドバイスをいただき、それまでモヤモヤとしていた部分がスーッと晴れるので、授業が終わるとホッとします。課題もたくさんいただきますけどね（苦笑）。

学部と大学院で違うと感じる部分を教えてください

田：学部の授業にもアクティブラーニング形式はありましたが、それでも「聞く」「知る」という時間が多かったように感じます。大学院では、「田さんはどう思いますか？」と尋ねられることが多く、「別の視点・私の視点を持っていいんだ！」と気付きました。また、学部のときより先生との距離が近く、気兼ねなく相談できています。学部は、先生1人に対してゼミ生が10人程度。大学院はどの授業も少人数ですが、演習の1対1の時間は貴重です。
ノヴァコフスキ：「少人数」ということは、学生同士の交流機会が少ない等のデメリットもあるかもしれませんが、教員との時間が十分に確保されることは、院生にとって良いことだと思いますし、私としても、学生が必要とするサポートをしやすいです。

入学検討者へのメッセージ

田：公益大・公益大大学院に「国際」と「情報」の分野があったから、今ここで研究をしています。「これは運命だな」とも思います。公益大には多様な専門分野をもつ先生方がいるため、きっと、みなさんも学び・研究したいと思う分野の先生方に出会えるはずです。
ノヴァコフスキ：疑問に思ったり、解決したい事柄について、情報科学の分野からアプローチできることもあるはずです。学部生の方だけではなく、社会人のみなさんにとっても、大学院はきっと身近な場所だと思います。オープンキャンパスや公開講座などに参加してみてください。

◆修了生の声

丸藤一貴さん
2023年3月修了
［自治体職員］

問題解決のアプローチとして

私は酒田市の防災担当職員として働くなかで、自治体がハザードマップ等を作成する際に考慮すべき内容・範囲について、明確な基準がないことに疑問を抱いていました。これは「住民の生命・身体を守る」という観点からは非常に重要な問題ですが、行政職員としての立場では単一の問題解決に専念することは困難があります。そこで、この問題について腰を据えて考えるため、酒田市の派遣研修の制度を利用して大学院に入学しました。

研究指導（演習）は法学を専門とする教員を選択し、法学の視点から上記の問題について考察を重ねました。その結果、一定の結論を導き出すことができ、市の防災行政に研究成果をフィードバックすることができました。このように、実務の現場では時間をかけて考察することが難しい社会問題について、研究者としてじっくりと考えることができるのが、大学院で学ぶ最も大きな利点であると感じています。

公益学研究科は「公益」を研究する場所ですが、「公益」は幅広い概念であるため、様々な社会問題について研究することができます。また、院生同士のディスカッションや、公開講座やセミナーを通して、異なる地域や様々な職業の方と意見交換することもできます。

現在お勤めの企業や官公庁等で問題意識を抱いている方には、問題解決のアプローチのひとつとして「大学院での研究」があることを知っていただきたいです。

中村知広さん
2023年3月修了
［自治体職員］

「知らないを知る」から始める研究生活

2021年に職場から大学院への入学を勧められてから2年間、私は高齢者の人とのつながりをテーマに研究を進めてきました。入学当初は「修了後に何かひとつくらい人に教えられるくらい詳しくなれたらいいな」と思っていましたが、実際に研究活動を始めて驚いたのは、「研究の世界は自分の想像以上に広く深い」ということでした。自分の研究テーマに関係するものだけでも先行研究は膨大にあり、それを読み込まなければ、自分は何を、どうして研究しようとしているのかを説明することすらできません。社会人としてある程度年月を過ごし、社会問題についても少しは理解しているつもりでいましたが、今まで自分がいかに世間について、偏見と憶測でわかった気になって過ごしていたかを思い知らされるところからのスタートでした。

公益大での2年間は「知らないことを知る」ところから始まる学び直しの時間であり、指導教員をはじめ先生方に支えていただき、他の院生や地域の方々と交流をしながら、社会との向き合い方を考え直す期間でした。少子高齢化をはじめとする社会の変化や国際情勢の緊迫化などを背景に、私たちは今後どうなるのかわからない不透明さの中を生きなければならない境遇にいます。将来がわからない不安に対し、ひとりで悩んだり対処しようとせず、地域の中にある大学院を活用し、周囲と一緒に問題について考える人がもっと増えてほしいと願っています。

富塚美咲さん
2023年3月修了
［自治体職員］

財産となる院生生活

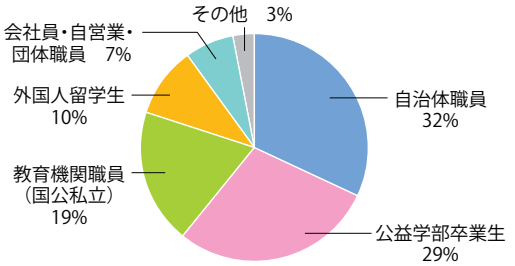
私は、自治体職員として勤務しており、研修派遣として入学しました。日中は業務にあたり、夜間や休日は大学院で講義を受講する日々は、目まぐるしくも私に新たな視点や気づきを与えてくれました。業務の傍らで、業務に関わりのある政策や事業を学術的な観点から研究できる機会はとても新鮮で、普段は実務的にその事業に携わっている私にとって、非常に有意義なものでした。

大学院では、企業や自治体に勤めながら大学院に通う社会人学生、学部から大学院に進学した学生、企業を定年退職後に入学した学生といった、さまざまな立場の学生がともに学んでいます。多くの講義がディスカッション形式で行われるため、お互いの考えを共有する機会が多く、多角的な視点からの多種多様な考えを聞くことで自分の視野を広げることができます。また、自分の研究を進めるうえでは、教員がマンツーマンで指導に当たってくださるため、手厚いサポートを受けながら論文執筆に集中することができます。私は、2年間の研究を通して理論を元にした実践モデルを提案することができました。

私は社会人学生としての入学でしたが、このような経験はとても貴重で、どのような立場の方であっても、きっとご自身の財産になると思います。

多くの出会い、学び、発見がある公益大大学院です。ぜひ一度、足を運んでみてください。

修士課程：2019年度から2023年度春学期までの入学者



公益大大学院での学び・学生生活は、ご自身のワークキャリアやライフキャリアにどのように役立っていますか？

- 論理的な思考（ロジック、モデル等）や、統計的分析の視点を業務に導入するようになった。
- 学問的な視点から客観的に根拠を持って物事を捉える考え方が身に付き、仕事にとても役立っています。
- 研究成果が認められ、希望する部署への異動が叶った。
- 講義でご一緒した院生同士の繋がりは、修了後も続いており、業務上のちょっとした相談なども気軽にできています。